

絵具に問う

2022 年度活動報告

美術研究科保存修復専攻では絵画の調査が日常的に行われており、画面の細部に関する画像や自然科学的な手法によるデータを多く得ている。これらのデータは絵画の保存や研究をする上で価値のある資料と考えられるが、これらを専攻でアーカイブする体制が整っていない状況があった。そこで、絵画からより多くを学ぶ環境を整えることを目的とし、保存修復専攻の研究活動によって得られた絵具に関するデータのアーカイブを目指して 2019 年度より活動してきた。

2019 年度および 2020 年度を通して、芸術資料館収蔵作品および専攻の授業である修復実習における修理作品を対象として行われる調査について、専攻が調査の実施を把握し、データを収集する仕組みの構築を行った。また、専攻を修了した紀芝蓮客員研究員が 2019 年度までに実施した調査で得たデータをアーカイブするための作業を進めてきた。紀研究員の調査は、近代日本画に使用された絵具の化学組成を明らかにすることを目的として実施され、芸術資料館に収蔵されている明治 30 年代から 40 年代にかけての京都市美術工芸学校および京都市立美術京芸学校の絵画科卒業作品を主要な対象としたものである。

近代日本画では、近代になって新たに使用されるようになった絵具があることが知られているが、これまで調査事例が少なく、その詳細は十分に明らかになっていない。アーカイブされた 88 点のデータは、絵具の種類や使用方法といった点から、近代日本画の分析への活用が期待される。

また、2020 年度から 2021 年度にかけて、芸術資料館に収蔵されている中国絵画 8 点について、白色顔料の同定を目的に行った調査データについてもアーカイブを行った。これらのアーカイブされたデータには、画面の拡大写真、赤外線写真、紫外線照射写真、顕微鏡写真、蛍光 X 線スペクトルが含まれる。蛍光 X 線スペクトルとは、蛍光 X 線分光分析によって得られるデータで、分析対象の含有元素の情報が得られるため、絵具の同定に利用できるデータである。アーカイブにあたり、写真の撮影条件および撮影箇所、蛍光 X 線分光分析の測定条件および測定箇所の記録とデータに齟齬がないか確認する作業を川下理恵氏の協力で行っている。

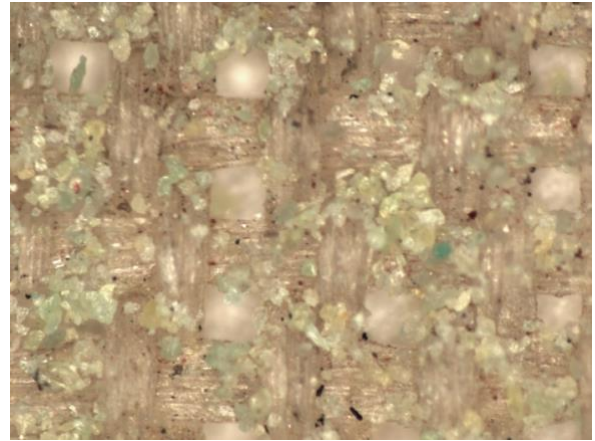
2022 年度は、2014 年度より修復実習で修理を行っている芦浦観音寺（滋賀県草津市）が所蔵する 19 幅の歴代住職の肖像画に関するデータを中心にアーカイブの作業を進めた。また、アーカイブしたデータを活用して、専攻の学生が顔の描法の分析を進めている。このほか、データをアーカイブする体制が整いつつあるのと共に、専攻の学生によるデータ利用の需要が出てきているため、データの活用の体制についても検討を行った。これまで、学生からデータ利用の要望があったときには、教務補助員が利用したい学生にその都度データを提供していたが、一部のデータについてはクラウドで専攻内に共有することを試行し、利便性の向上を図った。また、データの保全についても、より安全性の高いデバイスで保管するように改善した。今後は、より効率的な運用となるように改善を図りながら、データの活用の自由度を高めたい。

高林弘実





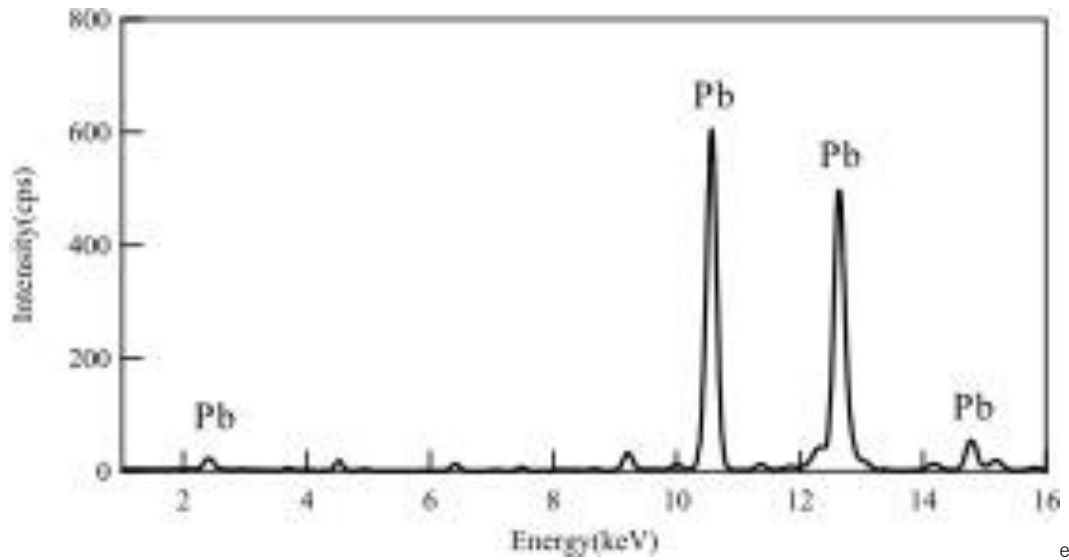
b



c



d



e

アーカイブしたデータの例：高倉観崖《夕陽》より

a.調査箇所の記録（全図） b.顕微鏡観察をした箇所 c.顕微鏡写真（28） d.蛍光X線分光分析の測定箇所

e.蛍光X線スペクトル（2837） これらのデータより、作品には緑鉛鉱による黄緑色の岩絵具が使用されていると推定された。